誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。
霊は燃えていても肉は弱いのです。 マルコの福音書　14章38節

今回も祈りについて共に学びます。今日お読みしたのは、イエス様が十字架にかかる前夜の出来事です。共に見ながら、神の御前でしばし自分自身を振り返ってまいりましょう。

イエスは十字架にかかる最後の一週間、昼間はエルサレムの町中で過ごし、夜になると城壁を出て、すぐそばにあるオリーブ山に退いて過ごされました。

過越の食事を終え、イエスは弟子たちを連れてオリーブ山に向かわれます。イエスたちはよくそこで祈っていました。イエスは、弟子たちの中からペテロ、ヤコブ、ヨハネの３人を連れて、更に奥へと進まれました。

「イエスは深く悩み、もだえ始め」（33）

悪霊を追い出し、病を癒し、人を生き返らせるような力強い姿、光り輝く栄光の姿ではなく、それとは正反対の、苦悩する姿でした。「もだえ始め」とは‘大きな暗黒に直面するときに生じる深い恐怖、身震いするような恐れ’を表す言葉と、‘精神的苦痛の結果としての半狂乱の状態、激しい苦悶、不安’を表す言葉が重ねて二つ用いられています。弟子たちの目の前で、イエスは深い恐れに囚われ、苦悶し始めました。

「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。」（34）

「私の人格を形作る知性、感情、意志がことごとく深い悲しみに打ちひしがれて死にそうだ」というのです。そしてここからは、弟子たちとも少し離れ、たった一人で地面にひれ伏して祈ります。

「それからイエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られた。そしてこう言われた。『アバ、父よ。あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。』」（35-36）

「地面にひれ伏し」

この時の苦しみがあまりにつらくて、悲しみがあまりに深くて、立っていることができないほど、イエスの心は砕かれていました。

「できることなら、この時が自分から過ぎ去るように」

この「時」とは明確な意味を持つ‘決定的な時’を意味します。イエスは救い主として来られました。救い主の役目は、私たち人類の罪をすべて背負って、私たちの代わりに神からの罰を受けて、私たちを救うことです。私たちの身代わりとなられたこのキリストを信じることで、私たちは神の赦しを受け、永遠のいのちをいただくのです。これが私たちのために神が開かれた道です。

「どうぞこの杯をわたしから取り去ってください。」

「杯」とは、旧約の昔から、人の罪に対する神様の怒り、罰、さばきを指します。

まさにこの時は過越の祭りでした。エジプトでの奴隷時代に解放してくれないエジプトに対する最後の災いの～初子を殺す～際に、小羊の血を家の門柱と鴨居に塗っていたユダヤ人の家は災いが通り過ぎ、無事エジプトを脱出できたことを記念するお祭りです。イエスは、まさにそのように自分の前を「この時」が通り過ぎてほしいと願ったのでした。それほど「この時」「この杯」は受けるにつらいものなのです。それは神のさばきの現実です。神のさばきは、全能の力を持つイエス様をもってしてもたやすく受けることのできない、悲惨なものです。いえ、神様を知り尽くしているイエスだからこそ躊躇してやまないものなのです。父なる神に 100 %従って来られた、罪を知らない神の子が私たちの罪を自分の身に引き受け、神の裁きを受けるのです。つまり神から見捨てられます。神のいない世界に突き落とされるのです。

皆さんにも経験があるのではないでしょうか。神の力、愛、きよさ、神の元にある平安を一番良く知っているイエスだからこそ、神に見放されることの恐ろしさも一番良く知っていました。だから、「取り去ってください」と祈ったのです。自分の使命を知っていながら、そう叫ばずにはいられなかったのです。

そして、本当は、このイエスの恐怖、苦しみを味わわなければならないのは、ここにいる私たちであるということを忘れてはいけません。「死」というものは美しいものではありません。死んだらすべてが終わる、人生の苦しみから解放されるというものではない、と聖書は言っています。人は必ず自分の罪の清算をしなければなりません。罪のある者は、神に裁かれ、神のいない地獄に投げ落とされ、罪のない者だけが神の支配する天国に行くことができますが、「義人はいない。ひとりもいない」と聖書は言います。そのままではだれ一人天国へは行けません。だから、イエスがこうして私たちの身代わりになって、神のさばきを受けてくださったのです。

パウロはこう言います。

「キリストは神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」（ピリピ 2:6-8）

イエスさまは 100 %人としてこの恐怖、苦悩と闘われたのです。

36 節：「しかし」強い否定です。

「私が望むことではなく、あなたが望むことを」

自分の意志ではなく、父の意志を自らの望みとしました。まさに「ご自分を空しく」なさったのです。イエスさまはこうおっしゃいました。「わたしの食べ物とは、わたしを遣わされた方のみこころを行い、そのわざを成し遂げることです。」（ヨハネ4:34）イエスの全人生は、神のご意志を行うことでした。

人として、イエスは祈りによってこの信仰の闘いに勝利なさいました。でも、イエスでさえこんなに格闘するのです。弱音を吐きます。「汗が血のしずくのように地に落ち」（Lk22:44）るほど必死に祈らなければ、勝利できないのです。もうすぐ去って行くイエスは、弟子たちにこの祈りの姿をあえてお見せになりました。

ところが、イエスが必死に祈る傍らで、弟子たちは何と眠りこけていました。「イエスは戻り、彼らが眠っているのを見て、」（37）しかも一度ならず、三度も、イエスが見に来られる度に、弟子たちは見事に眠っていました。

「そして再び戻って来てご覧になると、弟子たちは眠っていた。イエスは三度目に戻って来ると、彼らに言われた。『まだ眠って休んでいるのですか。』」（40-41）

最後は**「まだ眠って休んでいるのですか。」**これは「じゃあもうずっと寝て、体を休めていなさい。」とも訳せます。弟子たちは決して寝たくて眠ってしまったわけではありません。わざわざ呼ばれ、イエスについて行ったのです。さぞかし嬉しかったことでしょう。またすばらしい光景を見ることができるに違いないと期待に胸を膨らましていたことでしょう。ところが、イエス様はいつもとはまるで違う様相を呈し始めました。恐れ、苦しみ、もだえ始めたのです。一人先に進まれたかと思うと、倒れるように地面にひれ伏し、祈り始めました。ただならぬ雰囲気に寝てはいられなかったはずです。でも 3 人は眠ってしまいました。自分では起きていようとするのですが、どうしようもなくまぶたが重くなって、何かにまぶたを押し下げられるように目をつぶってしまうというのです。頑張っても頑張っても、気づくと眠ってしまっていました。これが私たち人間の姿です。

「イエスは戻り、彼らが眠っているのを見て、ペテロに言われた。『シモン、眠っているのですか。一時間でも、目を覚ましていられなかったのですか。 』」（37）

福音書の記者マルコは「ペテロ」と呼んでいるのに、イエスは「シモン」と呼んでいます。主自らがつけられた「ペテロ」という名ではなく、ただの人「シモン」と。ペテロは、この少し前に「たとい全部の者がつまずいても、私はつまずきません」「たといご一緒に死ななければならないとしても、私は、あなたを知らないなどとは決して申しません」と息巻いていました。でも、肝心な時に眠ってしまいました。「ペテロ」でい続けることができず、「シモン」になってしまったのです。

「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」（38）

ペテロの告白も覚悟も、嘘ではなかったでしょう。でも、自分の力だけでは目を覚ましていることはできません。信仰を告白する「ペテロ」であり続けることができないのです。40 節に「彼らは、イエスに何と言ってよいか、分からなかった。」とあります。自分でもどうして眠ってしまうのかわからなかったのでしょう。「霊は燃えていても肉は弱い」からです。

祈りは神様との交わり、天国のひとときです。祈りを通して私たちは神と交わり、神を知り、神の力をいただきます。神が何を望んでいるのか知ります。天国を見ます。祈らずに奉仕や仕事をして、トラブルが起きたり、イライラしたり、必要以上に疲れたり、そんな経験があることでしょう。「とても疲れて祈っている余裕はありません。」こんな風に言う人もいます。私たちは余裕があるから祈るのではありません。かっこつけるために祈るのでもありません。徳を積むために祈るのでもありません。私たち、主を信じる者にとって必要不可欠なことだから、祈るのです。生きる原動力だから、祈ります。そして、祈ると、眠ってはいられない状況が見えてきます。

苦しみ、悲しみの中でイエス様は祈られました。地面に突っ伏して、しかも同じ言葉で三度も、くり返しくり返し祈りました。こんなに格好悪いイエス様のお姿を見たことがありません。でもそれでいいのです。そうしなければ勝てません。どんなにみっともない姿でも、そのまま神様の前に出て、泣きながら、うめきながら、叫びながら、自分が納得するまで、確信が与えられるまで、くり返しくり返し何度も祈っていいのです。そう祈らなければ進むことができないのです。

今まで、子供を生き返らせる姿、栄光の姿を見せた弟子たちに、イエスは最後に敢えてこの祈りの姿をお見せになりました。こう祈って生きよ、と教えたかったのかもしれません。でも、弟子たちは眠りこけてしまいました。今まさに尋常でないイエスの姿を見ているのに、です。目を覚ましているように！とイエスがわざわざ命じておられるのに、です。いつ敵が捕まえに来るかもしれないのに、です。弟子たちには何も見えませんでした。そして、この後、捕らえられたイエスを見て、弟子たちはひとり残らず散り散りに逃げてしまいます。

これは私の姿です。信仰がないなぁと笑うことはできません。イスカリオテ・ユダのように、自ら神の元を離れるしかないのでしょうか。いいえ。見てください。37 節「イエスは戻り」40 節「そして、再び戻って来て」41 節「イエスは 3 度目に戻って来ると」、イエスは祈りながらも、弟子たちのことを心配して、弟子たちのところに来てくださいました。弟子たちが眠りこけるたびに。そしてそのたびに**「目を覚まして祈っていなさい」「祈り続けなさい」**と声をかけてくださるのです。落胆せずに、そのたびにハッと目を覚ましましょう。そして、そこからまた祈り始めましょう。

祈り終えたイエスには、もう何の躊躇も感じられません。42 節の**「立ちなさい」**は「起きなさい」とも訳せる言葉です。「さあ、もう十分眠ったでしょう。起きなさい。」「さあ、行こう。」「さあ、一緒に行こう。」イエスも共に行くのです。こうして、イエスは毅然と十字架の道へ進んで行かれます。

「目を覚ましていなさい。」

イエスは残して行く弟子たちに向けて、何度もくり返しこうおっしゃっています。今がどんな時かしっかり目を覚まして見ましょう。「神を愛し、隣人を愛」するどころか、自分の欲のために国と国が、人と人が争い、憎み合っています。偽預言者に惑わされ、不法がはびこり、多くの人の愛が冷えています。まさに終末のこの世の状況の中で、世に流されず、しっかりとイエスの教えに踏みとどまって、「神を愛し、隣人を愛す」わざに励むよう、共に必死に祈りながら、今週も「さあ、行こう」とのイエスの声に従って、それぞれが遣わされる場所に出て行きましょう。